慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「マルクスの基本定理」ノート (続)
Sub Title	A study of 'Fundamental Marxian theorem' (II)
Author	寺出, 道雄(Terade, Michio)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2022
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.114, No.4 (2022. 1) ,p.457 (125)- 462 (130)
JaLC DOI	10.14991/001.20220101-0125
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20220101-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」114 巻 4 号（2022 年 1 月）

研究ノート

「マルクスの基本定理」ノート（続）

寺出道雄 *

(1)　はじめに

この小稿——文字通りの小稿——の目的は，寺出（2021）の補遺として，「マルクスの基本定理」についての私見を再説することである。

同稿に対しては，本誌のチェッカーから，それは「一般的商品搾取定理」を述べたものに過ぎないとの趣旨のコメントをいただいた。

しかし，同稿は，「一般的商品搾取定理」を是とするものではない。

そこで，本稿では，労働者と資本家とに加えて土地所有者も存在する，カルドア＝パシネッティ型のリカード・モデルを用いて，「一般的商品搾取定理」の是非の問題とは独立に，「労働者は「搾取」されている」との命題は，利潤や地代が正の値をとることの，あり得る複数の解釈の 1 つに過ぎないことを見る。

なお，同チェッカーからは，労働価値説について「数理マルクス経済学」の成果を検討すべきであるとのお勧めもいただいた。その点については，別稿を期したいが，ひとまず，簡単な注を付しておいた。(1)

＊　慶應義塾大学名誉教授

(1)　大西（2020）の労働価値説を巡る議論では，さまざまな生産関数が用いられている。等労働量交換の必然性を論じた部分（pp. 71–74.），「マルクスの基本定理」を紹介した部分（pp. 93–104.），「再生産表式」を紹介した部分（pp. 148–155.），「転形問題」を紹介した部分（pp. 231–247.）では，通常の固定係数型の生産関数が用いられているようである。紹介が主だからといっても，一方で，$y = Al$（y は生産量。A は正の定数。労働 l の冪数が 1。）となる生産関数では「労働投入による生産が収穫逓減でなくなり，非現実的となる」（p. 15.）とされたのでは，読者は戸惑うばかりである。せめて，用いられている生産関数の性格の説明を行なった方がよかったのではあるまいか。例えば，「マルクスの基本定理」の紹介の中で行なわれている，労働価値説について論じる上で肝心であるはずの価値の定式化（pp. 95–96）は，どのような生産関数にもとづいてなされているのであろうか。それは，「非現実的」な生産関数にもとづいてなされているのではあるまいか。

(2) リカード・モデル

穀物を生産するただ1つの生産部門からなる資本制経済を想定する。

そこでは，労働者は労働を，資本家は資本を，土地所有者は土地を提供して生産が行なわれる。資本家の提供する資本は，生産に先立って労働者に支払われる穀物のみからなるとする。

生産の技術は所与で一定，すなわち，労働の土地装備率は所与で一定であり，労働量を L，土地面積を G で示せば，

$$G/L = \text{const.} \qquad ①$$

となる。また，ここでは，穀物の生産の拡大は，より豊度の高い土地からより豊度の低い土地に耕作が拡張されることによってなされるとする。

そうすると，①式から，穀物の生産量 Y は，労働量 L の関数となる。このある種の生産関数である②式は，次のようなものである。

$$Y = f(L) \qquad ②$$

$$f(0) = 0 \qquad \text{(a)}$$

$$f'(1) > \underline{w} > f'(\infty) \qquad \text{(b)}$$

$$f''(L) < 0 \qquad \text{(c)}$$

すなわち，(a)労働が投入されなければ，生産量はゼロである。(b)経済は当初は純生産可能であるが，いずれそれは不可能となる。ここで，$\underline{w}$ は，マルサス的な生存賃金である。(c)生産は耕作の拡張につれて収穫逓減にしたがう。

なお，労働者は，1回の生産において1人が1単位の労働を提供するものとする。

さて，以上のような条件のもとで，リカードによれば，労働者の得る賃金総額，資本家の得る利潤総額，土地所有者の得る地代総額は，以下のように決定される。

W で賃金総額，w で1人当たりの賃金を示すと，

$$W = Lw \qquad ③$$

$$w = \underline{w} \qquad ④$$

ここで，④式は，先に触れたような，マルサス的な生存賃金の存在を示す。労働者の1人当たりの賃金は，リカードがそれを受け入れていた，マルサス的な生存賃金に落ち着くのである。したがって，賃金総額 W は，③式のように，労働者数に1人当たりの生存賃金を乗じて決定される。

また，K で資本総額を示すと，

$$K = W \qquad ⑤$$

である。

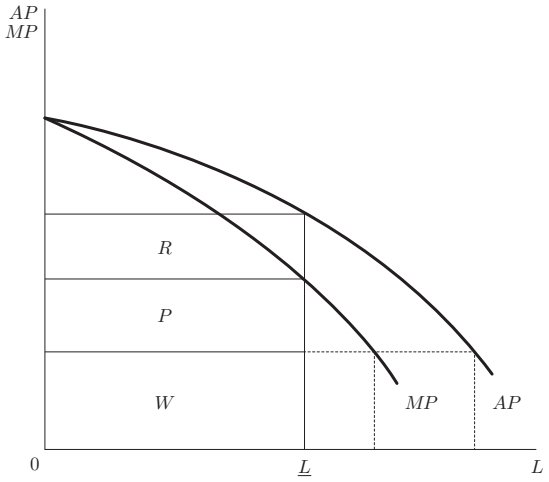
ところで，リカードによれば，限界地を耕作する資本家は，地代を支払わないのであるから，限界地を耕作する資本家の利潤は，

$$f'(L) - w \qquad ⑥$$

で決定される。一方，賃金は全耕作において均等であり，利潤率も資本家間の競争によって均等化されるから，利潤総額 P は，次の⑦式において決定される。

$$P = Lf'(L) - Lw \qquad ⑦$$

図



である。

さらに，R で地代総額を示すと，

$$R = f(L) - Lf'(L) \qquad ⑧$$

である。

総生産物から賃金総額と利潤総額とを減じた残余が地代総額 R をなす。それは，資本家間での競争によって，限界地より豊度の高い土地に生じた，限界地での利潤を上回る超過利潤の総額に等しくなるのである。

さて，ここで生産の水準が，

$$K = \underline{K} \qquad ⑨$$

で与えられると，図に示したように，労働者の得る賃金総額，資本家の得る利潤総額，土地所有者の得る地代総額が決定される。資本総額は，賃金総額に等しく，1 人当たりの賃金は生存賃金として一定なのであるから，図では，生産の水準を表す横軸は，労働量 L で示している。また，縦軸は，その労働の「平均生産力 AP」と「限界生産力 MP」を示している。

その場合，リカード自身の関心は，耕作が拡張されていくにつれて，労働の「限界生産力」は低下していき，一方，1 人当たりの賃金は一定なのであるから，⑥式に示された限界地における利潤によって決定される利潤率，

$$(f'(L) - w)/w \qquad ⑩$$

が，低下を続けることにあった。

そうした利潤率の低下によって，やがて利潤率はゼロに到達し，総生産物は，賃金総額と地代総額とに分配され尽くすようになる。しかし，リカードは，利潤率の低下によって，それが十分に低くなれば，資本家は，利潤率が正であるうちに，生産の拡大＝資本の蓄積を停止してしまうであろうと考えた。

そこでは，経済は「陰鬱」な定常状態に陥るのである。

——以上が，カルドア＝パシネッティ型の

リカード・モデルの概要である。本稿では，そうした資本制経済の動態そのものを問題とするのではなく，経済が定常状態へ到達する以前のある1時点を捉えて，労働者の得る賃金総額，資本家の得る利潤総額，土地所有者の得る地代総額の存在がどのような根拠によって成立し得るのかを見ていこう。

(3) 賃金・利潤・地代

1. さて，以上のような設定のもとで，利潤総額プラス地代総額が正であることは，

$$f(L) - Lw > 0 \qquad ⑪$$

で示される。

まず，リカードは，⑪式を，

$$f(L)/L > w \qquad ⑫$$

に変形して，利潤総額プラス地代総額が正であることを示すのである。

⑫式は，労働の「平均生産力」が労働者の賃金より大であることを語っている。ところが，リカードによれば，労働者の賃金は，マルサス的な生存賃金として与えられている。したがって，利潤総額プラス地代総額が正であることは，もっぱら労働の「平均生産力」が十分に大きいことに求められるのである。そうした正の利潤総額プラス地代総額が存在し得るのは，本来，「吝嗇」な自然が，いまだ人間の生産活動に対して，正の利潤総額プラス地代総額を提供することを許しているからなのである。

また，⑫式の逆数をとれば，それは，

$$1/w > L/f(L) \qquad ⑬$$

となる。

⑬式の左辺は，穀物1単位で雇用出来る労働量（穀物の支配労働量）を，右辺は穀物1単位の生産に投下されている労働量（穀物の投下労働量）を示している。したがって，⑬式の全体は，穀物の支配労働量が，その投下労働量より大であることが，正の利潤総額プラス地代総額が存在し得るための条件であることを示している。

これが，マルサスの把握であることは，言うまでもないであろう。

さて，いよいよマルクスの登場である。

マルクスは，⑪式を以下のように変形して，正の利潤総額プラス地代総額が存在し得るための条件を捉える。

$$1 > Lw/f(L) \qquad ⑭$$

⑭式の左辺である1は，前提によって，労働者1人が1回の生産において支出した労働量を示している。一方，右辺の $L/f(L)$ は，穀物1単位の生産に平均的に支出された労働量を，w は，労働者の賃金を示している。右辺の全体は，労働者が賃金として獲得した労働量を示すことになる。したがって，⑭式の全体は，労働者が生産において支出した労働量は，労働者が賃金として獲得した労働量より大であることを示している。正の利潤総額プラス地代総額が存在し得るためには，労働者は，自らの賃金を生産するために必要な時間を超えた時間の労働を支出していることになる。

――労働者は，資本家および土地所有者か

ら「搾取」されているというわけである。

2. しかしながら，ここで確認しておかなければならないことは，⑭式において，穀物は労働の生産物として評価されているということである。穀物は，労働の生産物としてのみ評価可能なのではない。

正の賃金総額プラス地代総額が存在することは，

$$1 > P/f(L) \qquad ⑮$$

で示し得るが，$K > 0$ であることを考慮すれば，⑮式は，

$$K > KP/f(L) \qquad ⑯$$

に拡大し得る。

⑯式の左辺は，資本総額を示している。一方，右辺の $K/f(L)$ は，穀物1単位の生産に平均的に支出された資本量を，P は，資本家の利潤総額を示している。右辺の全体は，資本家の利潤総額を生産するために支出されている資本量を示すことになる。したがって，⑯式の全体は，資本家が生産において支出した資本量は，資本家が利潤として獲得した資本量より大であることを示している。正の賃金総額プラス地代総額が存在し得るためには，資本家は，自らの利潤を生産するために必要な量を超えた資本を支出していることになる。

また，正の賃金総額プラス利潤総額が存在することは，

$$1 > R/f(L) \qquad ⑰$$

で示し得る。①式より，$G > 0$ であることを考慮すれば，⑰式は，

$$G > GR/f(L) \qquad ⑱$$

に拡大し得る。

⑱式の左辺は，生産に用いられる土地総量を示している。一方，右辺の $G/f(L)$ は，穀物1単位の生産に平均的に支出された土地量を，R は，土地所有者の地代総額を示している。右辺の全体は，土地所有者の地代総額を生産するために支出されている土地量を示すことになる。したがって，⑱式の全体は，土地所有者が生産において支出した土地量は，土地所有者が地代として獲得した穀物を生産するための土地量より大であることを示している。正の賃金総額プラス利潤総額が存在し得るためには，土地所有者は，自らの地代を生産するために必要な量を超えた土地を支出していることになる。

労働者と資本家と土地所有者との3者は，そのそれぞれの所得，すなわち賃金・利潤・地代を獲得するために，自らが所有する生産要素を，自らの所得を生産するために必要な量を超えて支出しているのである。

もちろん，以上のことは，賃金・利潤・地代のそれぞれの取得の「正当性」如何の問題とは，まったく別の問題である。

(4) 小括

以上において，労働者の得る賃金総額，資本家の得る利潤総額，土地所有者の得る地代総額の決定に関する，リカード的な解釈，マルサス的な解釈，マルクス的な解釈，さらに，マルクス的な解釈を基準としての「反マルク

ス」的な2つの解釈の，合計5つの解釈を見てきた。前3者および後3者は，それぞれ論理的に等価である。マルクス的な解釈と，「反マルクス」的な2つの解釈との3者は，「三位一体」でもあるのである。その点は，③式を用いて⑭式を，

$$1 > W/f(L) \qquad ⑲$$

と書き換えて，⑮式，⑰式と見比べれば，一目瞭然である。

なぜ，マルクス的な解釈のみが，資本制生産の「本質」を語っていると言えるのであろうか。(2)

なお，置塩（1979）も，「マルクスの基本定理」を巡る議論の中で，利潤の存在に関する多様な解釈可能性を指摘している。しかし，そこでは，議論が，労働価値説（投下労働価値説）による価値の定義にもとづいているために，マルクス的な解釈が「本質」的なものであることが，議論の前提のうちに含まれてしまっている。

本稿での議論は，労働価値説（投下労働価値説）の是非の問題とは独立な形で，「労働者は資本家と土地所有者とによって「搾取」されている」という命題が，正の利潤と地代との存在についての，あり得る1つの解釈に過ぎないことを示しているのである。

参　考　文　献

Kaldor, N. (1960) Alternative theory of distribution, in *Essays on Value and Distribution*, G. Duckworth.

Marx, K. (1996) *Capital*, Vol. I, International Publishers.

Pasinetti, L. (1977) *Lectures on the Theory of Production*, Columbia University Press.

Ricardo, D. (1951) *On the Principles of Political Economy and Taxation*, Cambridge University Press.

大西広（2020）『マルクス経済学』（第3版）慶應義塾大学出版会。

置塩信雄（1979）『資本制経済の基礎理論』創文社。

寺出道雄（1989）「マルクスの剰余理論」『三田学会雑誌』82巻3号。

————（2021）「「マルクスの基本定理」ノート」『三田学会雑誌』114巻3号。

(2)　リカード・モデルは，労働者の賃金を一定としたもとでの，人間の生産活動に対する，資源・環境による制約の問題を語っていると読み込めば，現代的な意義を持つ。